

2020MLAP 報告会 逐語記録

2021. 2. 7開催（オンライン配信）

実践報告：米倉 裕子（MLAP コーディネーター、音楽療法士）

座談：本山 悦子（知的障がいのあるこどもを持つ保護者）

石井 美紀（障がい者支援施設施設長）

野口 信介（福岡市立東福岡特別支援学校長）

牟田 智佳（福岡市博多区保健福祉センター福祉・介護保険課長）

総括 日高 徹（福岡市立屋形原特別支援学校長）

進行 下山 いわ子（福岡市手をつなぐ育成会長）

報告会の様子はこちら

2020MLAP報告会（1/4）

<https://youtu.be/wLqVZKNQjac>



2020MLAP報告会（2/4）

<https://youtu.be/e2-OTCBs4c0>



2020MLAP報告会（3/4）

<https://youtu.be/17IPMpfG7cY>



2020MLAP報告会（4/4）

https://youtu.be/yOHDqx1_BTQ



下山： 皆さんおはようございます。時間になりましたので始めたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

今回このMLAPの報告会にご参加いただきましてありがとうございます。

最初に、オンライン配信の問題について皆さんにご了承いただきたいことがあります。受信環境で止まることがあるかもしれませんがこちらでは対応しかねることがありますことをご了承お願い申し上げます。また、このコロナの緊急事態宣言下でもありますのでマスクをしたままで発表いたします。よろしくお願いいたします

併せて、オンライン配信が不慣れで途中で不具合があるかもしれませんが、担当者も手に汗しながら配信をがんばっておりますのでどうぞよろしくお願いいたします

博多区保健福祉センター福祉介護保険課の牟田課長が、3年前、教育委員会の生涯学習課におられました時に文部科学省の障害者の生涯学習を支援する新しい取り組みの募集があつてただ、手を上げません

か、とお話をいただきました。当会では 20 程前から今回もコーディネーターをお願いしている音楽療法士の米倉裕子先生と音楽療法の活動をしていましたので、米倉先生との活動をもっと広げることができるとおもいました。

それから 3 年間、連携協議会の皆様や多くの皆様のご協力のおかげで、音楽活動でどこでも誰でも楽しめる MLAP に取り組んできました

皆さんの中には MLAP って何？と思っている方もいらっしゃるのではないかとと思いますが、MLAP を知ってもらうと「楽しいね」って言ってもらえています。

今日は限られた期間ですが MLAP の魅力を皆さんにお届けしたいと思います。よろしくお願ひいたしますでは最初に MLAP コーディネーターでもある音楽療法士の米倉先生からの活用事例の紹介などをしていただきたいと思います。では自己紹介も踏まえて一緒によろしくお願ひいたします。

<米倉部分割愛> (動画配信)

はい、米倉先生どうもありがとうございました。MLAP の意義は誰でもどこでも楽しめるという、MLAP の魅力について改めてよくわかりました。紹介いただいた動画の配信は当会のホームページにもアップしていますので、ご覧いただけたらと思います。

それでは座談に入りたいと思います。今日は 6 名の方に来ていただいています。自己紹介をお願いします。まず総括をしていただく日高校長先生よろしくお願ひいたします。

日高： こんにちは屋形原特別支援学校長の日高です。この事業に関わってきた者としてですね、もう少し MLAP の未来のことがお話しできればなというふうに思っています。非常に楽しみにしておりますので皆さんどうぞよろしくお願ひいたします。

下山： 日高校長先生よろしくお願ひいたします。それでは本山さんよろしくお願ひいたします。

本山： 皆さんこんにちは。私は知的障がいのある子どもの母親です。私の子どもは市内の特別支援学校に通う男子中学 3 年生です。息子はダウン症で療育手帳でいいますと、A2 の重度の知的障害があります。この MLAP の活動は育成会の活動にある子どもの音楽遊びや療育キャンプなど、また、りんりんリンクスなど、5 年ほど前から親子で参加してきました。よろしくお願ひいたします。

下山： 本山さんありがとうございます。それでは一山先生よろしくお願ひいたします。

一山： こんにちは。失礼します。西日本短期大学の一山幸子と申します。学生と一緒に施設のボランティアに参加をしたり、手話のサークルをしたりしております。MLAP のボランティアも一緒に参加しております。どうぞよろしくお願ひいたします。

下山： 一山先生ありがとうございます。よろしくお願ひいたします。石井施設長、お願ひいたします。

石井： 皆さんこんにちは。私は社会福祉法人福岡市手をつなぐ育成会保護者会ひまわりの里で施設長をしております石井です。どうぞよろしくお願いいたします。

下山： 施設長ありがとうございます。野口校長先生、よろしくお願いいたします。

野口： 3年前に行政の立場で関わらせていただき、現在は特別支援学校の校長という立場で参加させていただいています。子どもたちが卒業どのように、生活していくのか、そのための力をどのように身に付けていけばよいのかを考えないといけないと思っています。今日は学校の立場からコメントができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします

下山： 野口校長先生ありがとうございます。それでは、牟田課長、よろしくお願いいたします。

牟田： 冒頭にもご紹介ありましたが、福岡市の教育委員会生涯学習課長をしております、現在、福祉の現場に戻りまして博多区の福祉・介護保険課で高齢者や障がい児・者の福祉や就労支援などを担当しています牟田です。よろしくお願いいたします。

下山： 牟田課長ありがとうございます。
今自己紹介いただいた方々、そして米倉先生にも入っていただいて座談を始めたいと思います。

まず最初に皆さんに、参加者の人たちに変化があったとか参加者の様子を伺いたいと思います。
本山さんのお子さんと本山さんご自身は今年度唯一リアルなMLAP体験をされたり、先ほど自己紹介でもありましたが、3年間MLAP体験をしてもらっています。MLAPに参加してお子さんやご自身で何か変化されたことがあったらお話を聞かせてください。

本山： はい、まず私の息子についてどのような状況かということ、障がいの程度についてですが、相手の言葉が理解はできますが、本人は母音の発音はできるんですが子音の発音は難しい。言葉によるコミュニケーション、会話によるコミュニケーションはちょっと難しいかなという状況です。

そんな中で音楽を介しての活動参加、いろいろな表現とか、正解のない、何をやっても認めてくれる、何をやっても楽しめる、本人がありのままでありのままの表現をすることが認めてもらえるっていう事からどんどん自信をつけていきました。それで今ではその他の場所での発表の機会とか、挨拶の機会も、はっきりとした言葉ではないんですけども自分から手を挙げて自分の意思を言う気持ちっていうのが、どんどん成長していったと思います。

保護者の私にとっては、保護者だけのプログラムに参加して子どもと一緒に、いつも子どもと一緒に子ども中心の生活なんですけれども、保護者だけで、大人だけの空間で楽しめるリラクソのプログラムを体験しました。もう一度自分を見つめ直す機会であり、みんなで音をつなげていくことは、ちゃんと相手の目を見て相手が自分のほうに向いてから渡すと言うことをしないと相手に伝わらない、こちらに注意が向いてない時いくら話しかけようがいくら言おうが全然理解してくれない、それはまさに子どもとのコミュニケーションの1番大切なことなんですね。

下山： はい、ありがとうございます。とても具体的にお子さんの様子や、お子さんの変わっていった様子、特にコミュニケーション力の成長について、言葉だけではなくて伝えようとする気持ちが、とても伸びてきたという話を伺えてよかったです。ありがとうございます。

それでは一山先生にお伺いします。一山先生は、MLAP の活動にほとんどすべて参加して下さっていて、先生の大学からもボランティアの方の参加を促していただきました。外国籍のボランティアの学生の方もいらっしゃいました。その学生さんたち、何か MLAP に関わって感想だったり変化だったりとか教えていただけますか。よろしくお願いします。

一山： 学生のボランティアの様子や感想、日本人の学生だけでなく留学生も参加させていただいております。その中で「参加者の皆さんの笑顔が見られて、とても元気が出た」とかですね、「初めは不安でしたけども自信を持って皆さんの前で MLAP のスタッフの先生方と一緒に踊り歌などできるようになりました。」「最初は子どもへの関わり方などがわからなかったけれど音楽遊びの体験を重ねていくと、お互いに楽しく参加できるようになりました。担当の子どもさんが踊って見せたり、手を握ってくれたりしてとてもうれしかったです。」それからベトナムの学生が、「もっと日本のうつくしい歌を憶えたい、手話の歌をもっと憶えたいと思いました。とても楽しかったのでまた参加したいです」という感想がありました。

MLAP に参加させていただいた学生は、もう行きたくないと言う学生は 1 人もいなかったです。また今度はいつあるんですか、もっと長い時間参加したいと言う感想でした。もっとボランティアに参加したい、和太鼓演奏がとても楽しかった。最高でしたと言ってくれましたね。

また、卒業して宮崎から今参加してくれていると思うんですが、「人の役に立つものならばもっとたくさん頑張りたい、できることを増やしたいと思いました。」それから就職してからもこの MLAP の経験が活かせると思います」と言い、障がい者施設に就職した学生もおります。学生達は一生懸命勉強したい、学びたいと思っています。

それで MLAP の音楽体験をして、人と関わって楽しい思い出を作ることができました。自信を持てたり意欲が向上したりという学生達の変化がありました。

それから自分もムラッパーになりたい、そして他の人にもムラッパーになってほしいという気持ちを持っていました。一緒にボランティアに参加してほしいと他のクラスメイトを誘うなどしていました。

下山： ありがとうございます。また、一山先生には地域応援団という方との関わりがあって、その方たちにも MLAP への参加の声かけをして頂きました。地域の方からの感想も伺えますか。

一山： 唐人町の地域でご近所応援団というグループがありまして、平成 18 年頃からお助け隊になろうというグループが、認知症の方が行方不明になったことがきっかけで始まった応援団です。そして MLAP の活動ということですね。

保育園の音楽発表会で子どもがとても嫌な思いをしている、楽器を見ただけで逃げたり泣いたりしてしまうので、音楽が大好きなのに、させられると感じたら逃げてしまいます。MLAP の動画を見たりしながら（こちらのお母さんは MLAP の動画も見てくださっているのですが）保育園にこそ、MLAP が必要ではないかというご意見がありました。また、民生委員の方から、MLAP の音楽活動を高齢者や障がい者の方々との活動にぜひ取り入れたいというご意見もありました。

下山： 一山先生ありがとうございます。地域だったり保育園だったり、いろんなところに MLAP が広がっていく先があるんだなあっていうのがよくわかりました。ありがとうございました。

それでは石井施設長ですが、施設の利用者やの方や職員の方の様子や、皆さんの変化した様子等があったら教えてください。

石井： はい。入所施設になりますので平成 23 年から音楽療法として音楽を取り入れた活動を余暇時間に過ごしてもらいながら、少し緊張する時間と楽しい時間をバランスよく過ごしてもらって日頃のストレスを解消して安定を目指すと言うところから取り組んできております。

職員は歌好きな方だったりとか、音楽を聴くのが好きな方だったりとか、体を動かすことが好きだったりの利用者の方にご参加を促しながら大体 8 名前後の利用者の方を中心にお声掛けをさせてもらってんですが、最近では講師の先生がいらっしやると

その基本メンバーでは無い方がその場所に自ら上って行って、特に体を動かすわけでもない方も一緒にその時間を楽しむと言うことができるようになってきております。

また職員に関しては、一緒に活動する方では無い方が参加をされたりだったりとか、表情とかにあまり出ない方もその時間ずっと椅子に座って過ごしたりする姿をみたり、あとは、職員の方、特に新しい職員の方たちは利用者の様子等も対応しながらこういう接し方もあるのだなというところで学んでるのではないかなと思っております。

動画配信については、動画を流すと利用者の方からやってきて、職員と一緒に楽しみながら体を動かすと言う事をしております。今年ですね、活動ができなかったんですが、実は MLAP で来ていただいている講師の先生と、その前に来ていただいていた講師の先生を中心に「ひまわりの里の皆さんで」と、福岡ひまわりの里限定の DVD 動画を作っていただきました。

動画配信枠を見ながら体を動かすことと、やっぱり一緒になって活動するっていう所では違いはあったかなと思っております。

下山： MLAP の良さがほんとにあらわれていてとてもうれしかったです。また利用者の方の変化を見て職員の方も変わっていくという、とても良い相乗効果もあらわれていて良かったです。ありがとうございました

リアル体験は今年度の活動は 1 度しかなかったんですが、本山さんとお子さんと体験していただきました。本山さんの家ではお子さんと一緒に動画配信も見ながら楽しんでいるという話を伺いました。リアル体験と動画配信について、違いや感じたことがあったら教えてください。

本山： 本当にリアル体験は貴重な 1 日でした。感染安全対策をきちんととられてソーシャルディスタンスを守りマスクをつけながらの活動でしたが、その中でも本当に久しぶりに体を動かし皆と会えた保護者の体験なんですが、指を鳴らして手を叩いて体を叩いて足を鳴らしてという、これだけで夕立を想像しながら、その夕立が来る前から夕立が来て去っていくって言うのをイメージしながら、自分たちが自分自身のイメージの通りに打ち合わせもなくしていくんですが、それが見事に本物の夕立があったかのような音になり、それをしたときにはもう皆が感動しました。

そしてそのコロナだからとか言ってできないわけではなく、いろんな可能性があるんだなあと思いました。数年前、保護者のプログラムで、米倉先生が「音楽ってあなたにとって何ですか？音楽って何でしょう？」と問いかけがあり、それぞれが答えたんですが、コロナ禍においてどんな状況になろうともこの世の中から音が出る限りこの『音を楽しむ』音楽っていうのはあるのかなあと思いました。それがリアルでの感想です。

あと動画でのあの配信は、テレビで動画を見られるようにつないで親子で見ました。

「オー・シャンゼリゼ」を子どもと一緒にしました。今日、子どもの気に入った動画の紹介はなかったんですが、「ぼちぼちいこか」と言う絵本はいろんな楽器で、内容はカバさんがやりたいと思うことを体が大きくなってなかなか出来なくて、できないって言う時に楽器とかドーンとかになって、あれ？とか言うところをすごく子供は喜んでました。今後ビートンとか広い会場でお友だちやボランティアさんと一緒にやったらもっと大げさにすっこけたりして喜びと思います。ぜひまたそういう日が来たらみんなで一緒にやりたいなあと思いました。

下山： はい、ありがとうございました。コロナ禍においても、リアルな活動もいろんな配慮しながらであれば可能だったと、音楽の可能性の広がりを感じました。
リアルを知ってるからこそ動画配信を楽しめる。動画配信を楽しみながら、また次のリアル体験を楽しみに待つ、というような様子がとても伝わりました。ありがとうございました。

それでは野口校長先生にお伺いします。MLAPの学校現場での活用の可能性や、活用方法とかお考えを教えてくださいいただけますか。

野口： はい。学校は子どもたちが学ぶ場ですので教育という視点から考えると、活動においては参加意欲が大切になると思います。意欲を高める上で大切なのは、まず最初のハードルの低さなのかなあと思います。この活動は無理だなんて思った段階で参加することが難しくなります。MLAPのよさは、まずは誰でも参加できるという視点をもっている事、そして、リズム遊びを中心とした音楽、つまり言語を超えた中で行える活動であるということだと思います。乳児の頃から音やリズムを聞くと自然と声が出たり、泣いたり笑ったりといった感情表現が自然と出てくるのが音楽のよさだと思います。そういう意味でMLAPの活動はすごくハードルが低いところからスタートでき、自分のレベルに合わせて参加できるところを大事にしているため、参加が容易な活動になっていると思います。

マズローの欲求の5段階説と照らしてみると、参加することで、自分は多くの人と一緒に関わる事が可能なんだという気持ちや一緒に関わる相手がいるんだという所属の欲求を得ることができそうですね、その先に、簡単な活動からスタートし、自分に合う活動ができるので、「できた！」ということを実感できるんですね。また、コロナ禍の中で生み出された方法ではありますが、オンライン配信を通して、もうちょっとしたかった、もう少し練習したいということも繰り返し活動できる環境ができたことで、皆と会って行うときに「できた！」という姿を見ることが可能になります。このことでムラッパーの方々からは「できたね」という言葉がかけられるようになり、認められたという承認の欲求につながっていくと思われます。そして、自分が承認されたという気持ちを感じることで、「次はこうしていきたい。」「これがしたい。」という自己実現の欲求につながることにあります。このように、MLAPの活動は、参加者の意欲を高め、自己実現の欲求を高める活動になっていると思います。また、意欲を高める上でとても大切なのは自分で工夫できるということです。MLAPの活動は、ベースの活動を少しアレンジしながら活動が膨らんでいきます。ムラッパーだけでなく、参加者にアレンジの方法をゆだねることもあります。この工夫することの喜びを知ると、「次はこうしたい」という欲求が生じてきます。その先に、また活動に参加しにいかうかなと思う人もいらっしゃるし、今度はボランティアをしてみたい、コーディネーターとして参加したいと考える人もいます。MLAPは、ムラッパーの養成やボランティアの参加など、自分の参加の仕方にも選択肢があるんですね。このように欲求を充足していくプロセスを繰り返すことで、子どもたちは確実に共生社会の中で自分の立ち位置を見いだしていけるようになるのかなあと思っています。

下山： 3年前に生涯学習のこのMLAP事業に取り組んではと声をかけてくださった牟田課長に伺います。生涯学習の意義や障がい者の生涯学習についてのお考えや3年間ご一緒にいただいたMLAPについてのご意見、課題などをお聞かせ下さい。お願いします。

牟田： 文部科学省が新しく障害者の生涯学習実践研究事業に取り組んだ趣旨自体は、私は障がい福祉にも従事していいんですけども、単に生活が保障されている、仕事をして賃金を得て社会における役割を果たすというだけではなくて、生涯にわたる学習だとか、その人らしい生き方、地域の中で社会の中で続けていくこと、それを改めて掘り下げ実践につなげていこうというモデル事業と理解していたので、文部科学省というところ、どうしても学習とか教育とか学びとかがウェイトを占めるんですけども、人とつながりや、それをさらに伸ばして、相互に理解しあえる相互学習。このMLAPの活動の目的、すなわち最終的に目指したいのは、障がいの有無とか年齢とか国籍とか性別とかなどにかかわらず、その人らしい生き方ができる地域社会を共生社会として実現していきたい、と。生涯学習の意義がそこまで届くのかわかりませんが、実際にやっていることはお互いに知り合うために、ハードルの低い、しかも楽しくてつながる、あるいは身近な地域で気軽にできるようなことを通じて、お互いに知り合い、つながり、それを続けていけるといいね、ということだと思うんですね。自立と成長を個人で果たした上で、さらに参加とか交流だとか互いに知り合う、そして楽しんで続けることにつながるっていけばと思います。

よく自立については、障がいや年齢によって足りない部分を社会的に補う意味で自立支援という言葉を使うんですけども、この活動を3年前に始めた時に、重度心身障がいの支援に関わっておられる方が、「自立とは、自分の足で立つという単にそれだけではなく、社会の中で個人その人が認められることが自立ではないか」と。その『自立』の反対は援助とか依存ではなくて『孤立』。自立の反対は、社会の中で関係性が途絶えること」という話がシンポジウムでありました。その人の生き方とかその人あり方とかを認めて、それをお互いに高めていこうということが目指しているところなんじゃないかなあと。この音楽活動自体は、経験を広げたり、参加した以上は人の活動も見てみよう、一緒にやってみよう、さらにそれを広げていく。あるいは地域の中で当たり前のこととして続けていく、繋げていく。生涯学習という小難しい言葉ではなくて、続けて地域で定着していくという意味なんじゃないかなと。3年間の活動で当事者間だけではなく、ボランティア参加者、地域の参加者も、先ほど、一山先生の話にもありましたけれども、最初は緊張していた、どうしていいかわからなかったという人が楽しかった、さらには、自分の自信にもなった、もっと広げたいと変化して、参加や活動が広がっていくことにつながった。こういう活動に行かなきゃいけないという活動ではなく、生きていくのに必要なものだし、みんなが楽しくて、先ほど野口校長も言われていた「楽しみながら自信を持ちながらもっと自分の世界を広げていきたい」と意欲を持てるような生涯学習、MLAPの活動はそのようなことに貢献できるのではないかなと思いました。

下山： 米倉先生、皆さんのお話を伺って米倉先生からあの何かご意見あったらお願いします。

米倉： はい、ありがとうございます。いやなんか、ただただ、感動して聞いておりました。また、野口校長先生がいろいろお話ししてくださった中で、子どもの学習の場面で、その子のペースでが発達していく過程で欲求がどんどん増えていく、次のレベルに上がってというお話をされました。私は、自分の発言の中で「訓練された音楽療法士」という言葉を何度か使ったんですけども、私たちの訓練の中にはやはり行動変容とかビヘイビアマネジメントの技術というすごく叩き込まれるところがありまして、そういったことを例えば、子どもたちやMLAPに参加して下さっている皆さんが少しずつ自分でやりたくなったり、それをその後々もその気持ちを引き出すような、行動が引き出されるような援助技術といいますか、マネジメント技術というものを、実は楽しくやっている音楽活動の中にちりばめておりました、見える

所の下に実は私たちのその細やかな技術というかそういったものにこだわっているんです。それが日常生活の中で生かされていくって言うことがもしあるとするならですね、こちらも更に工夫してやっていきたいなと少し感じたところです。

それと、音楽ってというのは、命が生まれた時から、もしくはお母様の体内の中にいる時から亡くなる最期まで聴覚の機能は残っていると言われてます。そしてそういった中で、ほんとに音楽的な要素に関わるのが私たちの人生の中ではあるんですけども。私は、関わっている病院の緩和ケア病棟において、患者さんと関わる、その方の人生の終わりの時にですね、一緒にその方の人生を振り返っていくってことを、音楽でやることあるんですけども、そういう時に、本当に豊かで魅力的で素敵だなあという人は、沢山の音楽経験を若い頃からそれまでにされてるなーっていうことを実感してますね。それで音楽を沢山経験するのは、なぜこのように豊かになって魅力的な時代人生なんだろうと、なぜ笑顔でそんな風に言えるのかなっていうふうにいつも感じてるんですけども、やはり音楽を介して沢山のの人に会うとか、いろんな人に興味を持つとか、音楽を介してやはりたくさん経験をきっとされてきた人なんだろうなあっていうふうにあの感じて。本当に出会えて嬉しいなって言う出会いが緩和ケアの現場でもたくさんあるんですけども、その方の人生での音楽活動ですけども、その点の活動が、その人たちの人生においてはラインになっていて、やっぱりつながっていて、その人の人生の先にはその豊かな人生が待っていて、そのお手伝いが音楽のできるのであれば、その人の人生の先に豊かな人生ってものがあればいいなっていうふうに、ほんとにMLAPでたくさんの人と関わりながらですね、その場限りかもしれませんが、また行きたいって来て下さって、2回3回お会いする方も増えてきて、そしてみんながそういう風と同じ経験を共有して行って、みなさんの人生がそれぞれ豊かになっていったら、こんなに素晴らしい事は無いなってふうに感じています。

あの人とつながりたいって言う気持ちはきっと誰にでもあって、その中でもやはりそのグループの中で大事にしているものの中に生きていくエネルギーに変えていけるんじゃないかなあ、そういうMLAPの楽しいって経験の中、体の中に蓄積して行って、そしていろんな人にそれが伝わっていくといいますが、そういう風な活動になっていくといいのかなと、少しずつ種をまくことができたのかなって印象です。以上です。

下山： 米倉先生ありがとうございます。壮大であるような、でもそれが今のMLAPの一つ一つ積み上げてきたことが、それにつながっていくんだなっていうのが、すごく今日の皆さんの話を聞いて見えてきた気がします。今日参加してくださっているカメラの向こうのみなさんの中にも、もしかしたら参加してみたいって思っていてくださっている方も出てきてくださっているのではないかなと思っています。

前半はMLAPの良さだったり、意義だったりという話をそれぞれの立場からしていただきました。後半は今後のMLAPについて、皆さんのお話を伺いたいと思います。野口校長先生お願いします。

野口： はい。先ほどMLAPの活動がもつ価値について話をしたのですが、障がいのある子どもたちが参加するイベントとしては、とても素晴らしいことは理解していただいたのではないかと思います。しかし、MLAPの活動は共生社会を志向し、障がいの有無に関わらず活動を共にすることに意味があります。その意味では、MLAPの意義を感じて一緒に活動する参加者ももっと増えてくるといいなあと考えています。先程の一山先生のスライドにもあったと思うのですが、障がいのある方とどのように関わっていけばよいかかわからないというのは正直なところだと思います。私は、まずは一緒に活動しようという姿勢でよいのではないかと思います。小学校では総合的な学習の時間の中で障がいのある方とどう関わったらよいかということ福祉的な観点から学習することがあります。その中での活動で、アイマスク体験や車いす体験を見ることが多々あります。そして、障がいのある方がすごく苦労してる、頑張ってるんだという側面ばかりを

感じ取らせる学習を見ることがあります。でも、実際は障がいのある方は助けを求めているわけではないんですね。自分でできることは自分でするし、一緒にできることは同じようにしたいと思っていますよね。そのあたりのことは、一緒に活動することで学べると思います。何かしないといけないって思うのではなくて、一緒に行くという意識が大切なのではないかなと思っています。それは、障がいに限ったことではなくて、高齢の方や外国の方との関わり方についても同じだと思うんです。そのような意味でも、誰もが関わられるMLAPの活動は、学校だけではなく、公民館のサークル活動等に組み込んでいくことも必要なのかなと思っていますところですよ。

下山： はい。ありがとうございます。ほんとに MLAP は今皆さんがお話ししてくださったように、また米倉先生のお話にもありましたように自然と障がいのある人もない人も国籍も関係なく年齢にも関係なく音楽体験あるなし、にかかわらず、知り合っていけると言う良さがあったと思います。
今、野口校長先生からも、障がいのある人ってどうやって関わったらいいかわからないって言うことで敷居が高くなる、というお話もありました。MLAP に参加して知り合うことで、みんな一緒じゃんって思えるような人が増えてくるって言う、MLAP の活動をこれから、もっと知ってもらうそのためには、どうしたらいいかなあというお話もありました。ありがとうございました。
他の方もお願いします。

牟田： 音楽ということになると、聴覚がいがある人はどうなんだろうと思われる参加視聴者の方もいらっしゃると思いますが、今までの MLAP の活動の中で難聴障がいのある男性の方が、その方は音楽なんか好きではないと、しぶしぶ付き合い程度に参加していたところ、太鼓の振動や体を一緒に動かすなど結構乗ってきて、他の人の様子をよく見ながら音楽でジョイントする、一緒になるというのはこんなことかと、最初の硬い、不機嫌な表情が、だんだん柔らかく、本当に楽しそうな表情に変わっていき、「楽しい！次も参加する」と言われて、しかもですね、聴覚障がいの方だけが集まるのではなくて、いろんな障がいのある方や地域の方々もいらっしゃる中で、特に、聴覚障がい者ですからとことさらに言ったり、障がいのある方たちだけを対象にするのではなく、野口校長先生もおっしゃってましたけれども、身近な生活している地域でそういう機会が増えていくことが、楽しむ、続けたい、となるうえで必要なんじゃないかと思います。
最初のスライド紹介で「MLAP の活用」ということで福祉現場、教育現場、医療現場と書いてありましたが、特に教育現場では、在学中に自分のことを地域でいろんな方々にもっと知ってもらおう、閉じこもって居心地の良いところだけにいるのではなくていろんな可能性を試していこうという気持ちになり、行動にすることを定着につなげてほしいと願います。

下山： ありがとうございます。とても具体的なご提案をありがとうございました。学校現場でも地域でも福祉事業所でも医療現場でも保育所でもいろんなところで活用できるそうですので、皆さん、参加者の皆さんの中、またお知り合いの中にこんなところがあるよ、っていうのがあったらぜひ当会まで声をかけていただけたらなあと思います。
他に何かご意見がある方。本山さんどうぞ。

本山： はい。うちの息子は特別支援学校に通っているんですけども、福岡市の『ふくせき制度』と言うものを利用して、居住地の小学校、中学校とも交流を小学校 1 年生の時から続けてきました。それで感じた事は、やっぱり小さいうちはお友達と一緒にできるんです。で歌だったりお遊戯だったり同じことで楽しめなくなる。差がちょっと開いていて、そのことが小学校から中学校に上がるときに自分の中で課題で、何をどうやったらうまく交流事業が続けられるのかなって思っていたところでした。

実際小学校では、お楽しみ会で一緒にダンスをしたり、そういうことを通して6年間で子どものことを知ってくれて、逆に私も地域の子供たちのことをすごくわかるようになりましたね。中学校でやったのはもう挨拶程度で、ちょっと自己紹介ぐらいしかできなかつたんですけど、また中学校を卒業したらその交流授業っていうのも今後なくなってしまう。そういった中、地域でこういうMLAPの活動機会があるとさらに知ってもらえるなーって思いました。小さい時、小さければ小さいほど理解してもらってやっぱり子どものことをどんどんわかってくれるんですが、いつから始めても遅くはないと思いますね。

このMLAPの活動は障がいのある本人が楽しいだけでなく、一緒にやっていて、さっき言った保護者の活動にしてもそうですけれども、みんなの音やそういうものが重なり合って、素晴らしい、楽しい、とみんなが感じられます。いろんな機会で行っていただけたらなあと思いました。

下山： ありがとうございます。

今中学生のお子さんがだんだん大きくなるにつれていろんなことを試されたりとか、考えられている本山さんならではのご意見だったと思います。

本山： ありがとうございます

小さい頃からですね、地域の人たちに知ってもらう、野口校長先生からもありましたけれども、障がいのある人対象にだけではなくてこのMLAPってほんとに地域の公民館活動で、まず地域の人たちにMLAPの活動や楽しさを知ってもらう。そしてその後、次から障がいがない人も一緒にできるんじゃないっていうふうにいったら自然に思えてきて、その広がりがあるっていう、その方向性もあるのかなあと思いました。また学校生活の中でMLAP体験した子どもたちが、学校卒業後にも同じような活動があると安心感だったりとか、保護者にとっても安心ではないかなと今感じました。

下山： ありがとうございます。それでは時間短くなってきたんですが、あのどなたか最後に一言と言うことがあればお願いいたします。

よろしいですか。

米倉先生、最後をお願いします。

米倉： ありがとうございます。私たち自身も含めてですけれども、新しい環境が苦手だと思います。やっぱり恐怖もあるし不安もあるし。特に子どもさんなんかですね。誰でもほっとできる場所って言うような。またどこでもいつでもどこでも誰とでもMLAPはあのそこにあるっていうような、なんかそういうお守りのような、またそれが実現になっていくように、少しずつまた整ってたくさん入っていけるかもしれないという話もありましたし、また皆さんのサポートいただきながら少しずつ実現して行けたらいいのかなあという気持ちです。以上です。

下山： ありがとうございます。座談に出席していただいた皆さん貴重なご意見どうもありがとうございました。それでは統括を日高高校先生、よろしくをお願いします。

日高： 総括になるかどうかは分かりませんが、3年間関わってきましたので何らかのまとめができればなと思って

います。

座談会ありがとうございました。中身の濃い話だったなと思っております。3年も経ったのかなというのが正直な今の私の感想です。1年目2年目はMLAPシンポジウムをしたり報告会をしたり年々やってきたんですけども、毎年少しずつ浸透してきているのかなと思っていました。

本事業が2年過ぎた昨年の報告会の時も、アナウンスの仕方が悪いんじゃないかという話をしたと思います。

野口校長とも話ながら学校でも何か工夫できる事はないかと言うことで、卒業生を中心とした今の青年と一緒にやって見れないかとかですね、学校の授業の中でどうにかすることができないかなど、ちょっと模索をしてやってみようと言うふうに話していたところでした。

3年目からはマスクをしてるんですけど、3年間続いたのはこのコロナの感染症が始まって以降もこの事業に関わって下さった全ての方々の努力の賜物だろうと思ってしております。ご協力に心より感謝いたしたいと思います。障がい者の生涯学習実践研究事業を今までずっと3年間更新してきたんですけども文科省も何かちょっと方向性が変わるって言うことで、これから先はないと言う事ですので、非常に残念なんですけれども

ただこれまでこの事業を通して培ってきたMLAPの活動というのは、非常に意義ぶかいものじゃないかなって言うふうに感じてます。

座談会中のお話でもですね、活動に取り入れてみたい、取り入れ方、この考え方とか有効だろうとかですねということもありました。また実際にこのMLAP活動に参加された方々はまァリピーターになることが多くてもう行かない人という人はほとんどいないとかですね。それから聴覚障害の方にもこの事業が有効であったという事例がありました。これまではあくまで障がい者の生涯学習実践研究と言うことでしたけども、座談会のお話の中にもまた私の中にもですね、今後は、あるいは地域で、あるいは学校で幼稚園と保育園であるいはいろんな施設等であのなんかちょっと音楽で楽しいことしたいなとか言うことがあるときにはぜひぜひですね、あのMLAPをご利用いただければなと言うふうに思います。

この3年間の皆様のご協力に感謝するとともに、これからもMLAPをずっと続けられるようように皆様にご協力をお願いしまして葉足らではありますけどもまとめとさせていただきたいと思います。

本日はほんとうにありがとうございました

下山： 日高校長先生ありがとうございました。とても心強いお言葉をいただいて、MLAPはこれで終わりではなくて次があるんじゃないかな、という期待に、今とても胸がいっぱいになっているところです。

文部科学省の事業としては最後の催し物で、みなさんの思いがとても強く溢れたことに私は感激しています。ありがとうございます。

今日はおれで終わります。

どこかでまた、MLAPでお会いしましょう。

では、MLAPの挨拶で終わります。

むらっぷう～！

【完】